

厚生労働科学研究費補助金
障害者政策総合研究事業

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如
多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

令和2年度～令和3年度
総合研究報告書

研究代表者 太田 晴久

令和4（2022）年 5月

目 次

I. 総合研究報告

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

研究代表者 太田 晴久 ----- 1

II. 分担研究報告

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

分担研究者 岩波 明 ----- 8

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

分担研究者 加藤 進昌 ----- 12

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 ----- 17

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
総合研究報告書

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

研究代表者 太田 晴久 昭和大学発達障害医療研究所 准教授

研究要旨

青年期・成人期の発達障害、特に自閉スペクトラム症と注意欠如多動症の支援ニーズは高い。しかしながら、薬物治療の効果は限定的であり、ショートケアプログラムなどの心理社会的治療が必要となる。本研究は、青年期・成人期の ASD と ADHD の社会的課題に対応するプログラムを開発し、学会などを通して全国に広げていくことを目指し実施された。

ASD に対しては、全 5 回からなるピアサポートプログラムを作成した。プログラム参加によりコミュニケーション技能の自己評価や QOL の向上が認められた。参加者は院内での自助活動や一部は外部の自助活動に繋がっており、自助活動への自信やモチベーションが惹起されたようであった。支援の受け皿が広がるのと同時に、当事者の自主的な活動をもとにした継続的な支援も担保することが期待できる。

ADHD に対しては、昭和大学附属烏山病院で実施していたプログラムを改定し、全 5 回で構成される汎用性プログラムと実施マニュアル・映像資料を作成した。これにより、支援者の経験や力量に左右されず全国的に均一なプログラムを受けることが出来るようになることが期待出来る。

家庭以外での社会的なつながりをもつことが希薄となりやすい発達障害者にとって、同様な困難を抱える当事者が集うプログラムは、支援のみならず自己の存在を肯定できる居場所としても機能し、自己理解の促進や適切な障害受容にも有用である。プログラムおよびマニュアルを作成したこと、プログラムの全国化を図ったことで青年期・成人期の発達障害に対する治療的受け皿の拡大が期待され、当事者の社会適応の改善に寄与するものと考えられる。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

岩波 明・昭和大学医学部精神医学講座 教授
中村 暖・昭和大学医学部精神医学講座 助教
横井 英樹・公益財団法人神経研究所研究部 客員研究員
五十嵐 美紀・公益財団法人神経研究所研究部 客員研究員
水野 健・公益財団法人神経研究所研究部 客員研究員
小峰 洋子・聖心女子大学現代教養学部心理学科 助教
加藤 進昌・公益財団法人神経研究所研究部 所長

我々は青年期・成人の自閉スペクトラム症（以下、ASD）に対するショート・ケアプログラム（全 20 回）を全国に先駆けて開発・実施してきた。プログラムの効果に関して対人スキル獲得を中心とする技術的な側面に注目が集まりがちであるが、そのみでは高度なコミュニケーション能力を求められる社会の現実に適応していくことは困難である。ASD プログラムが当事者の社会参加に寄与する中核的な要因の一つは、自分と似た仲間と出会い助け合えるというピアサポート効果にあるのではないかと考えている。

ASD は集団への適応や他者との関係継続を本質的に不得手とする。しかし、自分と似た特徴を持つ他の利用者と一定期間共に過ごすことにより、プログラム終了時点では凝集性の高まった集団となる。プログラムの参加により他者を信頼できる感覚が醸成され、自己および他者に対する否定的な認知の改善やメタ認知の向上などの結果として、孤立から社会参加への行動の変容につながっていることが考えられる。プログラムを終了した参加者による半自助的な集まりであるフォローアップグループ（以下、OB 会）がデイケア内にて複数開催されている。成人 ASD の当事者会は地域に複数存在するが、対人関係が引き金となり解散する当事者会が多く、プログラム終了者が適応しにくい状況がある。そのため、OB 会を病院内で継続開催し、居場所支援をしているが、医療が半永久的に支援をし続けることは困難である。

そこで、本研究では OB 会の状況、当事者会に参加・運営する際にどのようなことが必要か調査をし、

A. 研究目的

青年期・成人期の発達障害、特に自閉スペクトラム症と注意欠如多動症の支援ニーズは高い。しかしながら、薬物治療の効果は限定的であり、ショート・ケアプログラムなどの心理社会的治療が必要となる。

ASD ショート・ケアプログラムおよび OB 会での実践を基に、ピアサポートを活用したプログラム（以下、ピアサポートプログラムとする）を開発・実施し、青年期・成人 ASD 当事者に対する認知および行動の変容について検証し、支援者向けのマニュアルを作成する。そのことにより、当事者会の安定した運営の手法の構築やファシリテータの養成を目指していく。

ADHD に関しては、昭和大学附属烏山病院では、2013 年からは ADHD 専門外来、デイケアにおいて体系化された全 12 回の ADHD 専門プログラム（以下、現行プログラム）を実施し、現在までに 250 名以上が参加している。専門グループの参加により障害特性に対する自己理解が促進され、障害特性の軽減、社会的能力の向上が得られている。その他、情動の安定にも有用であり、QOL の向上が得られている。しかし、全国的にみるとデイケアで発達障害者を受け入れている施設は多いものの発達障害に特化した専門プログラムを実施している施設はごくわずかである（ADHD 専門プログラムを実施している機関 2% n=250、平成 30 年度厚労科研）。当院において一定の治療的な効果（不注意症状・不安の軽減）をあげているが、一般の精神科クリニックやデイケアにおいては、必ずしも容易に実施できるものではないことが推察される。また、成人期の ADHD 支援経験がある者も多くなく、具体的な支援方法のイメージをもてていないことも推察される。

高まる成人期 ADHD の心理社会的支援の必要性に応えるべく、一般の医療機関でも広く実施可能な汎用 ADHD プログラムおよび実施マニュアルを作成することにより、ADHD に対して心理社会的支援を受ける機会を増やすことが可能になる。また支援者の経験や力量に左右されず全国的に均一なプログラムを受けることが出来るようになる。これらによって多くの ADHD の当事者の社会適応の改善に寄与することが期待できる。

よって、本研究の目的は昭和大学で行われている ADHD 専門プログラム実践を基に、精神科クリニックやデイケアにおいても容易に実施できる汎用性プログラムを開発し、その取り組み易さと効果を複数の協力施設のデイケアにおいて検証し、支援者向けのマニュアルを作成することである。

B. 研究方法

ASD に関しては、昭和大学にて実施されたピアサポートプログラムに必要な要件を探るためのヒアリング調査（これまでの ASD プログラムを修了した者を対象として、昭和大学にて「探索的ヒアリンググループ（1.5 時間／回）」を開催）とアンケート調査をもとに、ピアサポートプログラムを作成する。

作成したプログラムを昭和大学および神経研究所で実施し、効果検証を行った。効果検証には、CSQ (Communication Skills Questionnaire)、STAI(State-Trait Anxiety Inventory)、GSES (General Self-Efficacy Scale)、WHOQOL26、SASS (Social Adaptation Self-evaluation Scale)、SFS (Social Functioning Scale)、GHQ - 12(The General Health Questionnaire)を使用し、プログラム参加群にはプログラム前後で質問紙を実施、対照群（プログラムに参加していない外来通院中の ASD 当事者）には同期間を開け前後に質問紙調査を実施した。

これらに加え、当事者会の現状について聴取、意見交換を行った。また令和 3 年度には成人発達障害支援学会にて、シンポジウム・ワークショップを開催し、発達障害者のピアサポートや自助会などについて情報共有を行った。

ADHD に関しては過去の現行プログラム参加者を対象に年齢や知的水準、生活状況等について診療録情報の分析を行った。そのうち 20 例を対象にヒアリング調査又はアンケートを行った。聴取内容は、・時間に関して・構成に関して・不足している内容や今後取り入れてもらいたい内容とした。さらにプログラム参加中の者に対しては、各回のプログラム満足度を CSQ-8J（日本語版 Client Satisfaction Questionnaire 8 項目版）を用いて収集した。

現行プログラムを担当した経験のあるスタッフへのヒアリング、今後 ADHD 専門プログラム実施を検討している研究協力機関スタッフへのヒアリングを実施した。聴取内容は、これまでのプログラム運営で困った経験や不安を感じた場面、改善のためのアイデアとした。協力施設（ハートクリニック横浜、埼玉医科大学附属病院、市ヶ谷ひもろぎクリニック）の意見も踏まえ汎用性プログラムおよびマニュアル類を作成した。

プログラム実施後、CSQ-8 J において参加者の満足度および、実施スタッフからのヒアリングを行い最終版の汎用性 ADHD 専門プログラムを完成させた。

（倫理面への配慮）

本研究は昭和大学附属烏山病院・神経研究所における倫理委員会の承認を得て実施する。

C. 研究結果

ASD に関しては、2020 年度に実施した探索的ヒアリンググループ（18 時間・延べ参加者 179 名）およびアンケート調査の結果から、「聴く」「話す」などの具体的なスキルトレーニングに加え、安心してグループに参加するためのルールやマニュアルの必要性が示された。これらを基にして実施した OB 会に対するアンケート調査（26 名）では、「OB 会に参加して役に立ったこと」として、全体の 7 割強（“ややあてはまる”も含む）が「居場所・安心できる場所があると感じる」「生活が楽しいと感じる」と回答し、半数が「友人・知人を作りたいと感じるようになった」という回答が得られた。当事者自身がグループを運営するにあたり必要な支援としては、「トラブル時の介入」が最も多く、次いで同数で「運営のサポート」、「情報提供」であった。グループ運営に必要なスキルとしては「自己理解」が最も高く、次いで「聴く」「トラブル対処」であった。また、東京都自閉症協会への聴取からは先駆的に自助グループを行っている 12 機関の紹介を受け、そのうちの 1 つである 2011 年より発達障害当事者会を運営している熊本の Little bit(リルビット)の活動を見学し、代表や顧問と安全な自助会の運営についての意見交換を行った。生じてきた課題や、そこで得た知見も含めて、当事者が自助会に参加・運営するために必要な条件の検討・整備し、プログラムを作成した（表 1）。

表 1 ピアサポートプログラム

タイトル	内容（参加人数）
------	----------

	タイトル	内容 (参加人数)
第1回	ピアサポートとは	ピアサポートを感じるのとはどんな時か話し合い、グループ内の役割について学ぶ
第2回	きくスキル	メンバーの話に耳を傾ける、共感するスキルについて学び、練習をする
第3回	語るスキル	グループ内で自らの経験を語ることに学び、自己開示について扱う
第4回	自助グループ疑似体験①	「言いつばなし、聞きつばなし」「問題解決技法」などの実際の技法を体験
第5回	自助グループ疑似体験②	ファシリテーター体験、板書体験、タイムキーパー体験、参加者体験。グループの振り返り、まとめ

プログラムには2機関で31名(昭和16名、小石川15名)が参加した。また、対照群として、2機関で22名(昭和10名、小石川12名)参加した。プログラム参加群と対照群とで、年齢、AQ、FIQに統計学的な有意差はみられなかった。質問紙を用いた調査では、プログラム参加群に対して前後で実施した評価(QOL、GSES、GHQ、SASS、対人反応性尺度、CSQ)のうち、プログラム後において、QOLが有意に向上($t=2.5$, $p=0.026$)、CSQ(コミュニケーション技能アンケート)で向上する傾向($t=2.1$, $p=0.054$)が認められた<対応のあるt検定>。参加群と対照群とのプログラム前後での比較では<反復測定二元配置分散分析>、QOL($F=4.3$, $p=0.048$)とCSQ($F=4.5$, $p=0.043$)において有意な交互作用が示された。CSQ-8(サービス満足度)の得点平均は25.4点であり、先行研究(立森ら)の平均22.3点を上回った。転帰として、昭和大学でのプログラム修了者14名のうち、5名が週に1度のペースで院内での自助活動を継続し、4名が外部の自助活動に自発的につながっている。小石川でも同様に、プログラム修了者15名を対象に、月に1度のペースでスタッフのサポートを得ながら当事者主体で行う自助活動プログラムを開始している。

さらに全国化を目指し第8回成人発達障害支援学会において、「ASDのピアサポート～治す医療から治し支える医療へ～」と題したワークショップを開催し、プログラム概要の説明と当事者を交えたプログラムデモンストレーションを行った。30名(定員30名)が参加し、参加者の満足度は平均93.1点/100点であった。また、プログラムの実施の可能性に対して尋ねたアンケートでは、56%が実施を検討し、26%が興味を示していた。

ADHDに関しては、既存のADHDプログラム修了者のカルテ調査からは、現行ADHDプログラム参加者は就労者が多く、AQ得点も高めであり(平均31.5/カットオフ33点)、初診からプログラム参加までの平均1年近く期間が空いていた。参加者からのアンケートからは、生活に関する社会資源、片付け/整理整頓、感覚過敏/鈍麻、調子/状態の波との付き合い方などのニーズが高いこと、ADHDの特性との関連が分かりにくいテーマでは満足度が低かった。CSQ-8Jは平均26.1点であった。オリエンテーションのみの初回と、ADHD特性との関連が一見すると

分かりにくい個別性が高いテーマにおいて満足度が低い傾向が認められた。

プログラム実施者および予定者からは、対応の仕方などについての不安があるため、マニュアルやプログラム運営を補う資料集の整備、参加基準の明確化が求めている。これらを踏まえ、汎用性プログラムおよびスタッフマニュアル、プログラムの映像資料を作成した。様々な施設での実施しやすさ、参加者への負担を考慮し、各回2時間、全5回とした。(表2、表3)

表2 汎用性ADHDプログラム

	テーマ
1回	心理教育(薬物療法、感覚過敏/鈍麻、併存症に関するも含む)/認知行動療法/参加者の困りごとの共有
2回	不注意
3回	多動/衝動
4回	対人関係(ASD傾向についても含む)
5回	ストレスコーピング/社会資源/まとめ

表3 現行版と汎用性プログラムの比較

	現行版	汎用版
回数	12回	5回
時間	3時間	2時間
ワークブック	○	○
マニュアル		
・紙面	×	○
・動画	×	○
資料集	×	○

汎用性プログラムの満足度は平均24.0点であった。作成したマニュアル、映像資料に対してスタッフからはマニュアルに教示の仕方があること、プログラムの進め方、終え方、予想される困難さへの対応策が示されていること、映像があることでマニュアルによる文字だけでは伝わりにくいニュアンスや雰囲気理解できるなどの意見が得られた。

D. 考察

ASDに関しては、ピアサポートプログラムの参加により、自助活動への自信やモチベーションが惹起され、多くが院内での自助活動を継続し、一部は外部の自助活動に繋がっていると考えられる。コミュニケーション技能の自己評価(CSQ)やQOLの向上はその現れと推察される。ASDに関しては、特性は生涯にわたり持続することが想定され、医療のみならず、社会全体での支援が求められる。ピアサポートを活

用したプログラムにより、支援の受け皿が広がるのと同時に、当事者の自主的な活動をもとにした継続的な支援も担保することが可能となる。さらに、発達障害支援学会でのワークショップでの満足度、関心は大変高く、プログラム実施により、各地域での当事者の実情に即した自助活動が発生することが期待される。

ADHD に関しては、プログラム対象者は就労者が多いため、短期間で行えることで、負担が少なく利用しやすいと言える。また、前後 30 分ずつのフォローの時間と 120 分のコアプログラムからなる構成としており、各施設の状況や参加者の背景に合わせ時間を調整でき、汎用性も高くなっている。プログラムの満足度は現行プログラムの満足度平均 26.1 点を下回ったものの、先行研究（立森ら、1999）の平均 22.3 点を上回っており、概ね内容としては好評であったと言える。時間短縮が影響した可能性が考えられたが、5 回であれば繰り返しの参加も可能であり、それにより満足度を補填出来るのではないかと考える。また、短期間で終了するため、ADHD 治療導入時や繰り返しの参加を認めるなど各施設でプログラムの位置づけや運用方法を工夫することにより、各施設の背景やニーズに合わせて活用することができると考える。

また、具体的な運営方法を示したマニュアル、映像資料により、実施者の経験に左右されないため取り組みやすさに加え、均一の質のサービスの提供につながることを期待できる。

E. 結論

ASD および ADHD への心理社会的支援の必要性は高い。我々は ASD、ADHD に対するショートケアプログラムを開発、実施してきた。ASD と ADHD はともに発達障害の一種であるが、支援のニーズはそれぞれ特色がある。

ASD では社会的コミュニケーションの問題が障害特性の中心にある。そのため、集団によるショートケアプログラムは治療的関与の中心となり得る。一般的なコミュニティの中では自然と疎外されていた当事者達にとって、自身の特性が受け入れられ、お互いに支え合うことは新たな経験となる。他者の存在を意識すると同時に、想像力に乏しい ASD にとって、自身の特性を具体的に振り返ることにもつながる。少なくとも知的に高い ASD の場合には、ピアサポートを活用する意義は高いと考えられるが、集団を自律的に維持するためには、参加者個々人の準備や障害特性に応じた構造の工夫が必要である。本研究でのピアサポートプログラムにより、支援の受け皿が広がるのと同時に、当事者の自主的な活動をもとにした継続的な支援も担保することが可能となる。

ADHD では ASD と比較して、社会適応度は高いことが多く、使用可能な薬剤も存在している。しかし、有病率は ASD よりも数倍高いことから、受診者の絶対数は ASD よりも多くなっていくことが予想される。各地域における多様な支援ニーズに対応し、様々な規模や地域の医療機関で実施される、汎用性のあるプログラム開発が求められている。ADHD に対して心理社会的支援を受ける機会を増やすことと、地域に関係なく均一なサービスを受けることが出来るようになり多くの ADHD の当事者の社会適応の改善に寄与するものと考えられる。

引き続き、本研究で開発した青年期・成人期の ASD と ADHD の社会的課題に対応するプログラムの普及を目指していく。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Fujino J, Tei S, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Kubota M, Hashimoto R, Takahashi H, Kato N, Nakamura M. Role of the right temporoparietal junction in intergroup bias in trust decisions. *Human Brain Mapping*, 41(6):1677-1688, 2020.
- 2) Itahashi T, Fujino J, Hashimoto RI, Tachibana Y, Sato T, Ohta H, Nakamura M, Kato N, Eickhoff SB, Cortese S, Aoki YY. Transdiagnostic subtyping of males with developmental disorders using cortical characteristics. *Neuroimage Clinical*, 27:102288, 2020.
- 3) Ohta H, Aoki YY, Itahashi T, Kanai C, Fujino J, Nakamura M, Kato N, Hashimoto RI. White matter alterations in autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in relation to sensory profile. *Molecular Autism*, 11(1):77, 2020.
- 4) Yoshihara Y, Lisi G, Yahata N, Fujino J, Matsumoto Y, Miyata J, Sugihara G, Urayama S, Kubota M, Yamashita M, Hashimoto R, Ichikawa N, Cahn W, van Haren NE, Mori S, Okamoto Y, Kasai K, Kato N, Imamizu H, Kahn RS, Sawa A, Kawato M, Murai T, Morimoto J, Takahashi H. Overlapping but asymmetrical relationships between schizophrenia and autism revealed by brain connectivity. *Schizophrenia Bulletin*, 46(5):1210-1218, 2020.
- 5) Kubota M, Fujino J, Tei S, Takahata K, Matsuoka K, Tagai K, Sano Y, Yamamoto Y, Shimada H, Takado Y, Seki C, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Hashimoto RI, Zhang MR, Suhara T, Nakamura M, Takahashi H, Kato N, Higuchi M. Binding of dopamine D1 receptor and noradrenaline transporter in individuals with autism spectrum disorder: A PET Study. *Cerebral Cortex*, 30(12):6458-6468, 2020.
- 6) Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunitatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Imamizu H. Generalizable brain network markers of major depressive disorder across multiple imaging sites. *PLoS Biology*, 18(12):e300096, 2020.
- 7) Itahashi T, Fujino J, Sato T, Ohta H, Nakamura M, Kato N, Hashimoto R, Di Martino A, Aoki YY. Neural correlates of

- shared sensory symptoms in autism and attention-deficit/hyperactivity disorder. *Brain Communications*, 2(2):fcaa186, 2020.
- 8) Shirama A, Takeda T, Ohta H, Iwanami A, Toda S, Kato N. Atypical alert state control in adult patients with ADHD: A pupillometry study. *Plos One*, 15(12):e0244662, 2020.
 - 9) Lin IF, Itahashi T, Kashino M, Kato N, Hashimoto R. Brain activations while processing degraded speech in adults with autism spectrum disorder. *Neuropsychologia*, 152:107750, 2021.
 - 10) Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Pupillometric complexity and symmetry follow inverted-U curves against baseline diameter due to crossed locus coeruleus projections to the edinger-westphal nucleus. *Frontiers in Physiology*, 12:614479, 2021.
 - 11) Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Identification of attention-deficit hyperactivity disorder based on the complexity and symmetry of pupil diameter. *Scientific Reports*, 11(1):8439, 2021.
 - 12) Tanaka SC, Yamashita A, Yahata N, Itahashi T, Lisi G, Yamada T, Ichikawa N, Takamura M, Yoshihara Y, Kunimatsu A, Okada N, Hashimoto R, Okada G, Sakai Y, Morimoto J, Narumoto J, Shimada Y, Mano H, Yoshida W, Seymour B, Shimizu T, Hosomi K, Saitoh Y, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Kawato M, Imamizu H. A multi-site, multi-disorder resting-state magnetic resonance image database. *Scientific Data*, 8(1):227, 2021.
 - 13) Fujino J, Tei S, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Izuno T, Nakamura H, Shimizu M, Hashimoto RI, Takahashi H, Kato N, Nakamura M. A single session of navigation-guided repetitive transcranial magnetic stimulation over the right anterior temporoparietal junction in autism spectrum disorder. *Brain Stimulation*, 14(3):682-684, 2021.
 - 14) Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunimatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Imamizu H. Common brain networks between major depressive-disorder diagnosis and symptoms of depression that are validated for independent cohorts. *Frontiers in Psychiatry*, 10:12, 2021.
 - 15) Tei S, Fujino J, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Kubota M, Sawajiri S, Hashimoto RI, Takahashi H, Kato N, Nakamura M. The right temporoparietal junction during a cooperation dilemma: An rTMS study. *Neuroimage: Reports*, 1(3): 100033, 2021.
 - 16) Naya N, Sakai C, Okutsu D, Kiguchi R, Fujiwara M, Tsuji T, Iwanami A. Efficacy and safety of guanfacine extended-release in Japanese adults with attention-deficit/hyperactivity disorder: Exploratory post hoc subgroup analyses of a randomized, double-blind, placebo-controlled study. *Neuropsychopharmacology Reports*, 41(1):26-39, 2021.
 - 17) Nakagawa A, Hayashi W, Nishio T, Hanawa Y, Aoyagi K, Okajima Y, Iwanami A. Similarity of subjective symptoms between autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in adults: Preliminary findings. *Neuropsychopharmacology Reports*, 41(2):237-241, 2021.
 - 18) Takamuku S, Ohta H, Kanai C, de C Hamilton AF, Gomi H. Seeing motion of controlled object improves grip timing in adults with autism spectrum condition: evidence for use of inverse dynamics in motor control. *Experimental Brain Research*, 239(4):1047-1059, 2021.
 - 19) Hayashi W, Hanawa Y, Iwami Y, Aoyagi K, Saga N, Nakamura D, Iwanami A. Correction to ASD symptoms in adults with ADHD: a preliminary study using the ADOS-2. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 272(2):233, 2022.
 - 20) Tei S, Tanicha M, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Qian C, Hashimoto RI, Nakamura M, Takahashi H, Kato N, Fujino J. Decision flexibilities in autism spectrum disorder: An fMRI study of moral dilemmas. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, Online ahead of print, 2022.
 - 21) 加藤進昌. 発達障害支援の現状とこれから. *心と社会*, 51(1)(179): 4-5, 2020.
 - 22) 五十嵐美紀, 水野健. 発達障害診療専門拠点機関の全国的な整備に向けてのガイドライン—成人発達障害者について—. *心と社会*, 51(1)(179):13-18, 2020.
 - 23) 太田晴久. ひきこもりと発達障害. *心と社会*, 51(1)(179): 38-43, 2020.
 - 24) 村上あゆみ, 牧山優. デイケアでの就労支援プログラムについて. *心と社会*, 51(1)(179): 44-50, 2020.
 - 25) 満山かおる, 川嶋真紀子. 心理カウンセリングの可能性. *心と社会*, 51(1)(179): 51-56, 2020.
 - 26) 横井英樹. 地域での発達障害支援の取り組み—全国の状況—. *心と社会*, 51(1)(179): 98-103, 2020.
 - 27) 太田晴久. 【精神科臨床評価マニュアル(改訂版)】(第3章)精神科臨床評価 特定の精神障害に関連したもの 神経発達症群/神経発達障害群 広汎性発達障害. *臨床精神医学*, 49(8):1466-1472, 2020.
 - 28) 太田晴久. 精神科併存症を考慮した発達障害の診断と薬物療法. *臨床精神薬理*, 23(9):925-

- 932, 2020.
- 29) 岩波明 (監修)、横井英樹. 第 6 章 成人期発達障害の心理社会的治療. おとなの発達障害診断・治療・支援の最前線, 光文社新書, 181-205, 2020.
- 30) 岩波明、五十嵐美紀、水野健. 第 1 章障害概念 IV. 大人の発達障害. 発達障害白書 2021 年版, 明石書店, 40-41, 2020.
- 31) 加藤進昌. 発達障害支援のこれからを考える. そだちの科学, 34:32-37, 2020.
- 32) 加藤進昌. 発達障害概念の誕生～歴史と国際分類の変遷～. Biophilia, 9(2):1-4, 2020.
- 33) 加藤進昌. 自閉スペクトラム症とは何か～自閉症とアスペルガー症候群. Biophilia, 9(2):6-10, 2020.
- 34) 太田晴久. 発達障害に対して医療ができること～診断から治療へ～. Biophilia, 9(3):1-4, 2021.
- 35) 横井英樹、水野健. デイケアプログラム—仲間と共に学び成長する場—. Biophilia, 9(3):6-12, 2021.
- 36) 五十嵐美紀. 成人期発達障害の家族支援. Biophilia, 9(3):26-32, 2021.
- 37) 太田晴久. これからの支援は. Biophilia, 9(3):40-44, 2021.
- 38) 太田晴久 (監修)、横井英樹、五十嵐美紀 (監修協力). 大人の発達障害 仕事・生活の困ったによりそう本, 西東社, 2021.
- 39) 太田晴久. コラム 6 成人期発達診療の現状と課題. 多職種連携を支える「発達障害」理解: ASD・ADHD の今を知る旅, 北大路書房, 137, 2021.
- 40) 加藤進昌. その行動も? 身近な発達障害 大人は生活の工夫で改善. NHK きょうの健康, 6 月号, 46-49, 2021.
- 41) 加藤進昌. その行動も? 身近な発達障害 女性・高齢者は見落とされやすい? NHK きょうの健康, 6 月号, 50-53, 2021.
- 42) 太田晴久. 成人期の発達障害. 東京の精神保健福祉, 40(2):1-3, 2021.
- 43) 加藤進昌、太田晴久 (編集). 発達障害の患者学 治す医療から治し支える医療へ. アドスリー, 2021.
- 44) 水野健、五十嵐美紀、横井英樹. 成人期 ADHD を対象とした心理社会的プログラム. 臨床精神医学, 50(5):447-453, 2021.
- 45) 岩波明、林若穂. 発達障害の概念を理解するための仮説 ADHD の病態は明らかとなったか仮説というファントム. 精神医学の基盤, 1:184-195, 2021.
- 46) 岩波明、林若穂、宮保嘉津真. 成人期 ADHD の症状評価スケール. 精神科, 38(3):324-331, 2021.
- 47) 小島睦、中村暖、林若穂、宇野宏光、花輪洋一、笹森大貴、太田晴久、岩波明. 気分障害患者における自閉症スペクトラム指数(AQ)、ユナーズ成人 ADHD 評価スケール(CAARS)の得点傾向と解釈. 昭和学会雑誌, 81(3):259-265, 2021.
- 48) 澤登洋輔、高塩理、橋本龍一郎、林若穂、小島睦、小野英里子、西尾崇志、青柳啓介、太田晴久、板橋貴史、岩波明. 自閉症スペクトラム障害における社交不安の神経解剖学的相関: Voxel-Based Morphometry を用いた予備的研究. 昭和学会雑誌, 81(3):229-241, 2021.
- 49) 中村善文、太田晴久、西尾崇志、土岐幸生、石部穰、林若穂、傅佳慧、加藤進昌、岩波明. 成人発達障害専門外来における診断名および自己記入式評価尺度の検討. 精神医学, 63(10):1555-1567, 2021.
- 50) 岩波明. 発達障害はなぜ誤診されるのか. 新潮選書, 2021.
- 51) 加藤進昌. 第 9 回 脳研究の第一人者・加藤進昌 東京大学名誉教授に聞く (1). 日経グッデイ 12. 23. 2021.
- 52) 加藤進昌. 第 10 回 脳研究の第一人者・加藤進昌 東京大学名誉教授に聞く (2). 日経グッデイ 12. 26. 2021.
- 53) 加藤進昌. ADHD の治療薬について教えてください. NHK きょうの健康, 1 月号, 99, 2022.
- 54) 加藤進昌. その行動も? 身近な発達障害 大人は生活の工夫で改善. NHK きょうの健康, 2 月号, 76-77, 2022.
- 55) 加藤進昌. その行動も? 身近な発達障害 女性・高齢者は見落とされやすい? NHK きょうの健康, 2 月号, 78-79, 2022.
- 56) 五十嵐美紀、横井英樹、加藤進昌. 【発達障がい—神経基盤から支援・治療まで】成人期発達障害に対するデイケア・就労支援. Clinical Neuroscience, 40(3):366-370, 2022.
2. 学会発表
- 1) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義, 東京・総務省消防庁消防大学校, 2020/6/19
- 2) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義, 東京・総務省消防庁消防大学校, 2020/8/21
- 3) 佐賀信之、横井英樹、五十嵐美紀、岩波明. 成人期 ADHD に対する精神科ショートケアプログラム. 第 116 回日本精神神経学会学術総会, オンライン, 2020/9/28-30
- 4) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義, 東京・総務省消防庁消防大学校, 2020/10/12
- 5) 加藤進昌. 職場の発達障害～その理解と対応～. 日本うつ病センター東京都地域特性重点特化事業「職場のメンタルヘルス」シンポジウム, ウェブセミナー, 2020/11/21
- 6) 加藤進昌. 大人の発達障害とは何か～いきづらさの正体～. 所沢市健康推進部保健センター健康管理課こころの健康支援室, 令和 2 年度第 2 回こころの健康講座, 埼玉・所沢市保健センター, 2020/12/18
- 7) 加藤進昌. 発達障害と生物学的背景. 令和 2 年度東京都発達障害者支援体制整備推進事業 医療従事者向け講習会, 東京・飯田橋レインボービル, 2020/12/20
- 8) 今井美穂、横井英樹、五十嵐美紀、水野健、太田晴久. 発達障害を有する学生の家族に対する支援プログラム. 第 42 回全国大学メンタルヘルス学会, オンライン, 2020/12/17-20
- 9) 五十嵐美紀、横井英樹、水野健、今井美穂、太田晴久. 切れ目ない発達障害学生支援のための

大学と医療ネットワーク構築の試み。第 42 回
全国大学メンタルヘルス学会、オンライン、
2020/12/17-20

- 10) 川嶋真紀子、牧山優、鶴田綾香、満山かおる、
太田晴久。発達障害を有する大学生へのショ
ートケアプログラム—医療機関での取り組み—。
第 42 回全国大学メンタルヘルス学会、オンラ
イン、2020/12/17-20
- 11) 相澤直子、安宅勝弘、太田晴久、丸田伯子、満
山かおる。大学において発達障害学生向けグル
ーププログラムを実施することの意義と留意点
について—A 大学における試行的実施から—。
第 42 回全国大学メンタルヘルス学会、オンラ
イン、2020/12/17-20
- 12) 加藤進昌。大人の発達障害への理解と対応～特
性を知り、長所を生かすには～。消防大学校幹
部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、
2021/1/18
- 13) 加藤進昌。大人の発達障害への理解と対応～病
院経営とデイケア運営へのインパクト～。陽和
病院講義、東京・陽和病院、2021/1/25
- 14) 加藤進昌。成人の発達障害と障害者歯科。東京
都立心身障害者口腔保健センター主催障害者歯
科認定医・認定歯科衛生士研修会、東京・東京
都立心身障害者口腔保健センター、2021/2/7
- 15) 加藤進昌。成人期の発達障害の臨床～心理の本
質の理解から社会的自立への支援まで～。一般
社団法人日本臨床心理士会 第 14 回障害の理解
と支援に関する総合研修会 (4)、オンライン、
2021/2/21
- 16) 加藤進昌。精神科診療所における発達障害支援
～グループワーク事始め。令和 2 年度日精診・
医療計画等検討プロジェクトチーム研修会、オン
ライン、2021/3/7
- 17) 加藤進昌、五十嵐美紀。大人の発達障害の理解
と支援 令和 2 年度障害福祉の理解研修「大人
の発達障害の理解と支援」、オンライン、
2021/3/22
- 18) 水野健、横井英樹、五十嵐美紀、佐賀信之、中
村暖、中村善文、岩波明。ADHD 専門プログラ
ム改訂の取り組み。第 2 回日本成人期発達障害
臨床医学会、東京・昭和大学上條記念館、
2021/3/27-28
- 19) 五十嵐美紀。デイケアを用いた社会復帰と就労
支援。第 2 回日本成人期発達障害臨床医学会、
東京・昭和大学上條記念館、2021/3/27-28
- 20) 加藤進昌。大人の発達障害への理解と対応～特
性を知り、長所を生かすには～。消防大学校幹
部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンラ
イン、2021/6/10
- 21) 加藤進昌。大人の発達障害への理解と対応～特
性を知り、長所を生かすには～。消防大学校幹
部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンラ
イン、2021/8/20
- 22) 糸井千尋、加藤進昌、柏野牧夫。反復単語刺激
を用いた錯聴に対する自閉スペクトラム症、注
意欠如多動症者の知覚。第 85 回日本心理学会
大会、オンライン、2021/9/1-8
- 23) 花輪洋一、林若穂、岩見有里子、青柳啓介、佐
賀信之、中村暖、岩波明。成人期 ASD と ADHD
における ADOS-2 の検討。第 117 回日本精神神
経学会学術総会、京都、2021/9/19-21
- 24) 中村暖。成人期の ASD と ADHD～診断、治療に

おける共通点と相違点について～ 成人期の
ASD と ADHD 診断、治療における共通点と相違
点について。第 117 回日本精神神経学会学術総
会、京都、2021/9/19-21

- 25) 山田真理、太田晴久、久保浩明、香月亮子、加
藤隆弘、加藤進昌、岩波明。自閉症スペクトラ
ムにおけるひきこもりの生物心理社会的な共通
基盤の解明。第 117 回日本精神神経学会学術総
会、京都、2021/9/19-21
- 26) 藤野純也、鄭志誠、板橋貴史、青木悠太、太田
晴久、久保田学、橋本龍一郎、中村元昭、加藤
進昌、高橋英彦。行動経済学的手法を用いて検
証する不確実な状況における自閉スペクトラム
症の意思決定。第 117 回日本精神神経学会学術
総会、京都、2021/9/19-21
- 27) 加藤進昌。大人の発達障害への理解と対応～特
性を知り、長所を生かすには～。消防大学校幹
部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンラ
イン、2021/10/15
- 28) 加藤進昌。発達障害とは何か、共に暮らすため
に～発達障害と精神障害～。2021 年度大家連
精神保健福祉講座、オンライン、2021/10/23
- 29) 加藤進昌。大人の発達障害の医療と支援の今後。
板橋区発達障がい者支援センターあいポート講
座、動画配信、2021/11/20～2022/3/31
- 30) 加藤進昌。大人の発達障害とは～心理劇による
アプローチを考える～。第 27 回日本心理劇学
会福岡大会、福岡、2021/12/4
- 31) 加藤進昌。発達障害の行動変容に心理劇は貢献
できるか。第 27 回日本心理劇学会福岡大会、
福岡、2021/12/4
- 32) 加藤進昌。大人の発達障害への理解と対応～特
性を知り、長所を生かすには～。消防大学校幹
部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンラ
イン、2022/1/7
- 33) 加藤進昌。発達障害研究から脳の多様性～
Neurodiversity に迫る～。玉川大学脳科学研
究所竣工記念講演会、東京、2022/1/20
- 34) 加藤進昌。発達障害に関するスキルアップ講座
「U-SQUARE」。世田谷区発達障害相談・療育セ
ンター講演、東京、2022/2/5
- 35) 加藤進昌。成人期の発達障害者に対する医療機
関の取組について。令和 3 年度東京都発達障
碍者支援体制整備推進事業シンポジウム、オン
ライン、2022/2/14
- 36) 加藤進昌。大人の発達障害の理解と支援。障害
福祉の理解研修、世田谷区福祉人材育成・研修
センター、オンライン、2022/3/28
- 37) 水野健。大人の発達障害の理解と支援。障害福
祉の理解研修、世田谷区福祉人材育成・研修セ
ンター、オンライン、2022/3/28

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当なし
3. その他
該当なし

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

研究分担者 岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座 教授

研究要旨

青年期・成人期の注意欠如多動症（以下、ADHD）の支援ニーズは高い。しかしながら、薬物治療の効果は限定的であり、ショートケアプログラムなどの心理社会的治療が必要となる。昭和大学附属烏山病院では、2013年から ADHD 専門外来、デイケアにおいて体系化された全 12 回の ADHD 専門プログラム（現行プログラム）を実施し、障害特性に対する自己理解が促進され、障害特性の軽減、社会的能力の向上、情動の安定につながり、QOL の向上が得られている。しかし、一般の精神科クリニックやデイケアにおいては、成人期の ADHD 支援経験がある者は少なく、具体的な支援方法やイメージを持ちにくいこと、必ずしも容易に実施できるものではないことが推察された。高まる成人期 ADHD の心理社会的支援の必要性に応えるべく、一般の医療機関でも広く実施可能な汎用 ADHD プログラムおよび実施マニュアルを作成し①ADHD に対して心理社会的支援を受ける機会を増やすこと②支援者の経験や力量に左右されず全国的に均一なプログラムを受けることができるようになることを目的に本研究は実施された。

アンケート調査、ヒアリング調査を基に全 5 回、コアプログラム 2 時間で構成される汎用性プログラムと一般の医療機関でも広く実施可能な汎用 ADHD プログラムおよび実施マニュアル・映像資料も作成した。汎用プログラムは短期間で終了するため、各施設でプログラムの位置づけや運用方法を工夫することにより、各施設の背景やニーズに合わせて活用することができる。また具体的な運営方法を示したマニュアル、映像資料により実行の可能性が高まることを期待できる。これにより、当事者の社会適応の改善に寄与できると考える。

A. 研究目的

青年期・成人期の注意欠如多動症（以下、ADHD）の支援ニーズは高い。しかしながら、薬物治療の効果は限定的であり、ショートケアプログラムなどの心理社会的治療が必要となる。

昭和大学附属烏山病院では、2013年からは ADHD 専門外来、デイケアにおいて体系化された全 12 回の ADHD 専門プログラム（以下、現行プログラム）を実施し、現在までに 250 名以上が参加している。専門グループの参加により障害特性に対する自己理解が促進され、障害特性の軽減、社会的能力の向上が得られている。その他、情動の安定にも有用であり、QOL の向上が得られている。

全国的にデイケアで発達障害者を受け入れている施設は多いものの発達障害に特化した専門プログラムを実施している施設はごくわずかである（ADHD 専門プログラムを実施している機関は 2%、n=250：平成 30 年度厚労科研）。当院において一定の治療的な効果（不注意症状・不安の軽減）をあげているが、一般の精神科クリニックやデイケアにおいては、必ずしも容易に実施できるものではないことが推察される。また、成人期の ADHD 支援経験がある者も多くなく、具体的な支援方法やイメージをもてないことが推察された。高まる成人期 ADHD の心理社会的支援の必要性に応えるべく、一般の医療機関でも広く実施可能な汎用 ADHD プログラムおよび実施マニュアルを作成することにより、ADHD に対して心理社会的支援を受ける機会を増やすことが可

能になる。また支援者の経験や力量に左右されず全国的に均一なプログラムを受けることができるようになる。これらによって多くの ADHD の当事者の社会適応の改善に寄与することが期待できる。

よって、本研究の目的は昭和大学で行われている ADHD 専門プログラム実践を基に、精神科クリニックやデイケアにおいても容易に実施できる汎用性プログラムを開発し、その取り組み易さと効果を複数の協力施設のデイケアにおいて検証し、支援者向けのマニュアルを作成することである。

B. 研究方法

1) 現行プログラム参加者に対する調査

これまでの参加者の年齢や知的水準、生活状況等について診療録情報の分析を行った。

現行プログラムを終了した者、あるいは参加中の患者 20 例を対象とした。終了者に対してはヒアリング調査又はアンケートを行った。聴取内容は、・時間に関して・構成に関して・不足している内容や今後取り入れてもらいたい内容とした。参加中の者に対しては、各回のプログラム満足度を CSQ-8J（日本語版 Client Satisfaction Questionnaire 8 項目版）を用いて収集した。

2) 現行プログラム実施スタッフに対する調査

現行プログラムを担当した経験のあるスタッフへのヒアリング、今後 ADHD 専門プログラム実

施を検討している研究協力機関スタッフへのヒアリングを実施した。聴取内容は、これまでのプログラム運営で困った経験や不安を感じた場面、改善のためのアイデアとした。

3) 汎用性プログラムおよびマニュアル類の作成
1) 2) の結果および協力施設（ハートクリニック横浜、埼玉医科大学附属病院、市ヶ谷ひもろぎクリニック）の意見も踏まえ汎用性プログラムおよびマニュアル類の作成していく。プログラムの実施およびCSQ-8 Jにおいて参加者の満足度および、実施スタッフからのヒアリングを行い最終版の汎用性 ADHD 専門プログラムを完成させた。

（倫理面への配慮）
本研究は昭和大学附属烏山病院臨床試験審査委員会の承認のもと実施した。

C. 研究結果

1) 現行プログラム参加者の基礎情報
プログラム参加者は、約半数は何らかの形で就労や学生、主婦などの社会的役割をもっていた。FIQは平均101.2±14.1、VIQが平均103.7±13.9であるのに対してPIQは平均98.2±15.5とやや低く、またAQは31.5±7.3（カットオフ33点以上）であった。初診年齢は33.4歳±10.7歳、DC開始年齢は34.3歳であり、ある程度の外来を経てプログラムを開始する傾向が見られた。また平均教育年数は14.9年であり、大体高卒以上となる。プログラム開始時に無職だったものは、終了から3-4年後に就労する者が多かった。

2) 現行プログラム参加者へのヒアリングおよびアンケート
すでにプログラム修了した利用者を対象にアンケート調査を実施した結果（配布数40名中、回答者数15名、回収率37.5%）、講義形式、ディスカッション形式、開始前の近況報告（1分間スピーチ）は仕組みとして良好な評価であった。また、不足している内容や今後取り入れてもらいたい内容として、生活に関する社会資源、片付け/整理整頓、感覚過敏/鈍麻、調子/状態の波との付き合い方について等が挙げられた。

3) 現行プログラムの評価
現行プログラム参加者（2グループ、計18名）に対して、プログラムの患者満足度はCSQ-8J（8~32点）の結果、26.1点であった。1回および11回目での評価が低くなっていた。

4) 現行プログラムを担当した経験のあるスタッフへのヒアリング
現行プログラムを担当した経験のあるスタッフに対するヒアリングからは、「対処法を蓄積しスタッフが共有する必要がある。支援者マニュアルとしてアイデア集を持っていることで、グループ内で挙げられなかった対処法のカテゴリーを紹介することが可能となる。」「短時間での変化を求める人も多いため、最初か正解が得られないことを説明・理解してもらったうえで

の参加を促し、ディスカッションする良さを伝える必要がある。」「近況報告（1分間スピーチを行うことでプログラム内容にも関連づけられることがあるため必要。」「パーソナリティ障害傾向、対人距離が近い（常識的な範囲内ではない）、困りごとがない、言語化できない、話が止まらない、フラッシュバックが頻回な参加者がいるとグループ運営に配慮が必要。」等の意見が挙げられた。

5) 研究協力機関へのヒアリング
研究協力機関（市ヶ谷ひもろぎクリニック）スタッフに対して、プログラム導入に関して課題や不安な点についてのヒアリングを実施した。「ディスカッション内容をホワイトボードに記録をしなければいけないため、書く技術が必要」「話過ぎてしまう、逸脱行動のある参加者への対応への不安」が挙げられた。

6) 汎用性プログラムの作成と実施
6) -1 プログラム作成
結果の1) ~5) を受けて以下を作成した。ADHD支援の少ない支援者は、対応の仕方などについての不安があるため、マニュアルや資料集の整備、参加基準を求めていることが明らかとなった。これらの結果と、8回の検討会議を経て、汎用性プログラムの作成を行った。様々な施設での実施しやすさ、参加者への負担を考慮し、各回2時間、全5回とした。内容は表1のようにした。

表1 各回テーマ

	テーマ
1回	心理教育（薬物療法、感覚過敏/鈍麻、併存症に関しても含む）/認知行動療法/参加者の困りごとの共有
2回	不注意
3回	多動/衝動
4回	対人関係（ASD傾向についても含む）
5回	ストレスコーピング/社会資源/まとめ

6) -2 マニュアル作成
マニュアルには、プログラム開始前の導入の仕方、各回のプログラムの目的、講義、ワークの時間の目安、セリフや良く出される意見なども含めた進行例を示していく。映像資料は、マニュアルを補完するものとし、特にマニュアルだけではイメージが付きにくい場面であるグループ進行やグループ運営の様子、参加者への対応の仕方（話が止められなくなった場合やフラッシュバックを起こした場合など）、ディスカッション時の意見の整理の仕方や記録（板書）方法を盛り込んだ。資料集は、これまでの原稿プログラムの実践を基にグループ共有された特性への対処法をまとめたものとした。

6) -3 プログラム実施と評価
汎用性ADHDプログラム参加者の患者満足度はCSQ-8J（8~32点）は平均24.0点であった。また、

マニュアル、映像資料に対してスタッフからはマニュアルに教示の仕方があること、プログラムの進め方、終え方、予想される困難さへの対応策が示されていること、映像があることでマニュアルによる文字だけでは伝わりにくいニュアンスや雰囲気理解できるなどの意見が得られた

D. 考察

汎用性プログラムおよびスタッフマニュアル、プログラムの映像資料を作成した。

現行プログラム参加者のカルテ調査を踏まえると、プログラムを必要としているのは就労者が多かった。短期間で行える点は負担が少なく利用しやすさが求められていると考えられた。また、社会での他者との関わりが多くなることで、ADHD特性に対する対応の必要性が自覚されていることを示唆しており、内容へ反映させた。参加者への負担だけでなく、施設側の実施しやすさも含め全5回、各回120分とした。前後30分ずつのフォローの時間と120分のコアプログラムからなる構成とすることで、各施設の状況や参加者の背景に合わせて時間を調整できることで汎用性を高めた。

マニュアル、映像資料に対してスタッフからはマニュアルに教示の仕方があること、プログラムの進め方、終え方、予想される困難さへの対応策が示されていること、特に映像があることでマニュアルによる文字だけでは伝わりにくいニュアンスや雰囲気が理解できるなどの意見が得られた。さらに資料集があることで、実施スタッフはディスカッションが停滞した際に事例の1つとして紹介することが出来る。また参加者も手元へおき日々の生活の中で活用することも可能となると考える。これらにより、より多くの施設で取り組み易くなったと考える(表2)。

表2 現行プログラムと汎用性プログラムの比較まとめ

	現行版	汎用版
回数	12回	5回
時間	3時間	2時間
ワークブック	○	○
マニュアル		
・紙面	×	○
・動画	×	○
資料集	×	○

汎用性プログラムの満足度は平均24.0点であった。現行版で不十分であった点を補ったものの現行版の満足度平均26.1点を下回った。これは参加者のコメントから時間増種が影響した可能性が考えられたが、5回であれば繰り返しの参加も可能であり、それにより満足度を補填出来る可能性もある。

以上より、今回作成した汎用性プログラムは

マニュアル、映像資料により実行の可能性が高まることを期待できると考えられた。また、短期間で終了するため、ADHD治療導入時や繰り返しの参加を認めるなど各施設でプログラムの位置づけや運用方法を工夫することにより、各施設の背景やニーズに合わせて活用することができると考える。

E. 結論

ADHD に関しては、投薬によって自己肯定感の低さは改善させることは難しく、症状の改善は日常生活における適応の改善に直結しないこともある。従ってADHD当事者本人の特性を理解し、自己肯定感を改善させ、精神的・社会的問題を解決するために、心理社会的支援のもつ役割は非常に大きい。本研究では、一般の医療機関で実施可能な汎用ADHDプログラムを作成した。これによりADHDに対して心理社会的支援を受ける機会を増やすことにつながり、多くのADHDの当事者の社会適応の改善に寄与するものと考えられる。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

- 論文発表
 - Shirama A, Takeda T, Ohta H, Iwanami A, Toda S, Kato N. Atypical alert state control in adult patients with ADHD: A pupillometry study. *PLoS One*, 15(12):e0244662, 2020.
 - Naya N, Sakai C, Okutsu D, Kiguchi R, Fujiwara M, Tsuji T, Iwanami A. Efficacy and safety of guanfacine extended-release in Japanese adults with attention-deficit/hyperactivity disorder: Exploratory post hoc subgroup analyses of a randomized, double-blind, placebo-controlled study. *Neuropsychopharmacology Reports*, 41(1):26-39, 2021.
 - Nakagawa A, Hayashi W, Nishio T, Hanawa Y, Aoyagi K, Okajima Y, Iwanami A. Similarity of subjective symptoms between autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in adults: Preliminary findings. *Neuropsychopharmacology Reports*, 41(2):237-241, 2021.
 - Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Pupillometric Complexity and Symmetry Follow Inverted-U Curves Against Baseline Diameter Due to Crossed Locus Coeruleus Projections to the Edinger-Westphal Nucleus. *Frontiers Physiology*, 12:614479, 2021.
 - Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Identification of attention-deficit hyperactivity

disorder based on the complexity and symmetry of pupil diameter. Scientific Reports, 11(1):8439, 2021.

- 6) Hayashi W, Hanawa Y, Iwami Y, Aoyagi K, Saga N, Nakamura D, Iwanami A. Correction to ASD symptoms in adults with ADHD: a preliminary study using the ADOS-2. European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience, 272(2):233, 2022.
 - 7) 岩波明 (監修)、横井英樹. 第6章 成人期発達障害の心理社会的治療. おとなの発達障害 診断・治療・支援の最前線、光文社新書、181-205, 2020.
 - 8) 岩波明、五十嵐美紀、水野健. 第1章障害概念 IV. 大人の発達障害. 発達障害白書 2021年版、明石書店、40-41, 2020.
 - 9) 横井英樹、水野健. デイケアプログラムー仲間と共に学び成長する場ー. Biophilia, 9(3):6-12, 2021.
 - 10) 岩波明、林若穂. 発達障害の概念を理解するための仮説 ADHD の病態は明らかとなったか 仮説というファントム. 精神医学の基盤、1:184-195, 2021.
 - 11) 岩波明、林若穂、宮保嘉津真. 成人期 ADHD の症状評価スケール. 精神科、38(3):324-331, 2021.
 - 12) 水野健、五十嵐美紀、横井英樹. 成人期 ADHD を対象とした心理社会的プログラム. 臨床精神医学、50(5):447-453, 2021.
 - 13) 小島睦、中村暖、林若穂、宇野宏光、花輪洋一、笹森大貴、太田晴久、岩波明. 気分障害患者における自閉症スペクトラム指数(AQ)、コナーズ成人 ADHD 評価スケール(CAARS)の得点傾向と解釈. 昭和学会雑誌、81(3):259-265, 2021.
 - 14) 澤登洋輔、高塩理、橋本龍一郎、林若穂、小島睦、小野英里子、西尾崇志、青柳啓介、太田晴久、板橋貴史、岩波明. 自閉症スペクトラム障害における社交不安の神経解剖学的相関: Voxel-Based Morphometry を用いた予備的研究. 昭和学会雑誌、81(3):229-241, 2021.
 - 15) 中村善文、太田晴久、西尾崇志、土岐幸生、石部穰、林若穂、傳佳慧、加藤進昌、岩波明. 成人発達障害専門外来における診断名および自己記入式評価尺度の検討. 精神医学、63(10):1555-1567, 2021.
 - 16) 岩波明. 発達障害はなぜ誤診されるのか. 新潮選書、2021.
2. 学会発表
 - 1) 佐賀信之、横井英樹、五十嵐美紀、岩波明. 成人期 ADHD に対する精神科ショートケアプログラム. 第116回日本精神神経学会学術総会、オンライン、2020/9/28-30
 - 2) 水野健、横井英樹、五十嵐美紀、佐賀信之、中村暖、中村善文、岩波明. ADHD 専門プログラム改訂の取り組み. 第2回日本成人期発達障害臨床医学会、東京、2021/3/27-28
 - 3) 花輪洋一、林若穂、岩見有里子、青柳啓介、佐賀信之、中村暖、岩波明. 成人期 ASD と

ADHD における ADOS-2 の検討. 第117回日本精神神経学会学術総会、京都、2021/9/19-21

- 4) 中村暖. 成人期の ASD と ADHD~診断、治療における共通点と相違点について~ 成人期の ASD と ADHD 診断、治療における共通点と相違点について. 第117回日本精神神経学会学術総会、京都、2021/9/19-21
- 5) 山田真理、太田晴久、久保浩明、香月亮子、加藤隆弘、加藤進昌、岩波明. 自閉症スペクトラムにおけるひきこもりの生物心理社会的な共通基盤の解明. 第117回日本精神神経学会学術総会、京都、2021/9/19-21

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当なし
3. その他
該当なし

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

研究分担者 加藤 進昌 公益財団法人神経研究所研究部 所長

研究要旨

ASDは集団への適応や他者との関係継続を本質的に不得手とする。しかし、自分と似た特徴を持つ他の利用者と一定期間共に過ごすことにより、プログラム修了時点では凝集性の高まった集団となる。本研究ではASDショート・ケアプログラムおよびフォローアップグループ（OB会・マスターコース）での実践を基に、ASDに対するピアサポートを活用したプログラムを開発・実施し、その効果を検証する。神経研究所では令和2年度にはプログラム開発のためのアンケート調査を行った。令和3年度においては、前年に昭和大学にて行った「探索的ヒアリンググループ」やアンケートにから作成された「ピアサポートプログラム」の実施と効果検証を行った。プログラム参加群・対照群に前後比較のため質問紙調査を行い、プログラムによる変化を検討した。

また、R2年度には、東京都自閉症協会の幹部に対し、当事者会の現状について聴取し、R3年度には2011年より発達障害当事者会を運営している熊本のLittle bit(リルビット)の活動を見学し、代表や顧問と安全な自助会の運営についての意見交換を行った。加えて、成人発達障害支援学会の協力のもと、シンポジウムや情報共有を行い、プログラムの全国化を図るとともにネットワークの構築を図った。

A. 研究目的

我々は青年期・成人の自閉スペクトラム症（以下、ASD）に対するショート・ケアプログラム（全20回）を全国に先駆けて開発・実施してきた。プログラムの効果に関して対人スキル獲得を中心とする技術的な側面に注目が集まりがちであるが、そのみでは高度なコミュニケーション能力を求められる社会に適応していくことは困難である。ASDプログラムが当事者の社会参加に寄与する中核的な要因の一つは、自分と似た仲間と出会い助け合えるというピアサポート効果にあるのではないかと申請者らは考えている。

ASDは集団への適応や他者との関係継続を本質的に不得手とする。しかし、自分と似た特徴を持つ他の利用者と一定期間共に過ごすことにより、プログラム終了時点では凝集性の高まった集団となる。プログラムの参加により他者を信頼できる感覚が醸成され、自己および他者に対する否定的な認知の改善やメタ認知の向上などの結果として、孤立から社会参加への行動の変容につながっていることが考えられる。神経研究所では、2019年よりプログラムを終了した参加者によるフォローアップグループ（通称マスターコース）がデイケア内にて開催されている（登録者25名）。成人ASDの当事者会は地域に複数存在するが、対人関係の問題が引き金となり解散する当事者会が多く、プログラム終了者が地域の資源に適応しにくい状況がある。そのため、マスターコースを病院内で継続開催し、居場所支援をしているが、医療が半永久的に支援をし続けることは困難である。

そこで、当事者会に参加・運営する際にどのようなことが必要か調査をし、ASDショート・ケアプログラムおよびマスターコースでの実践を基に、ピア

サポートを活用したプログラム（以下、ピアサポートプログラムとする）を開発・実施し、青年期・成人ASD当事者に対する認知および行動の変容について検証し、支援者向けのマニュアルを作成する。そのことにより、当事者会の安定した運営の手法の構築やファシリテーターの養成を目指していく。

B. 研究方法

昭和大学にて実施されたピアサポートプログラムに必要な要件を探るためのヒアリング調査（これまでのASDプログラムを修了した者を対象として、昭和大学にて「探索的ヒアリンググループ（1.5時間/回）」を開催）とアンケート調査をもとに、全5回のピアサポートプログラムを作成した。

神経研究所では作成したプログラムを前述したマスターコース参加者に向け、実施し、効果検証を行った。効果検証には、CSQ（Communication Skills Questionnaire）、STAI（State-Trait Anxiety Inventory）、GSES（General Self-Efficacy Scale）、WHOQOL26、SASS（Social Adaptation Self-evaluation Scale）、SFS（Social Functioning Scale）、GHQ-12（The General Health Questionnaire）を使用し、プログラム参加群（9名）にはプログラム前後に質問紙を実施、コントロール群（12名）には同期間を開け前後に質問紙調査を実施した。

これらに加え、昭和大学、神経研究所において、熊本にて当事者会を運営するLittle bit(リルビット)の定例会に参加し、リルビットの代表と顧問に対して当事者会の現状について聴取、意見交換を行った。

また令和3年度には成人発達障害支援学会にて、

「ASD のピアサポート～治す医療から治し支える医療へ～」というシンポジウムを開催し、発達障害者のピアサポートや自助会などについて情報共有を行った。

(倫理面への配慮)

本研究は昭和大学附属烏山病院・神経研究所における倫理委員会の承認を得て実施する。

C. 研究結果

昭和大学にて行われたヒアリング調査や、探索的ヒアリンググループより、ピアサポートプログラムの作成を行った。プログラム内容としては、昭和大学で実施されたヒアリンググループやアンケート調査の結果から「聴く」「話す」などの具体的なスキルを学ぶことに加えて安心してグループに参加するためのルールや、参加者がファシリテータを務める際のマニュアルの作成などが必要であることが明らかになった。その意見をもとに、第1回にて安心して参加できるグループについて意見を出し合う内容を含めた。また第2回、第3回では「きく」「語る」というグループに参加する際に必要なスキルを習得し、実践する内容を作成した。第4回、第5回では、他の自助グループなどでも使われている「言いつばなし、聞きつばなし」「問題解決技法」などの自助グループでの手法を参加者がファシリテータ、板書、タイムキーパーを務め、半自助グループとして実践する内容とした。調査の結果をもとに、第4回、第5回での「自助グループ疑似体験」では、ファシリテータのマニュアルを作成し、参加者が安心してファシリテータを経験することができるように資料の工夫をした。

神経研究所では、マスターコースに向け、このピアサポートプログラムの実施をし、効果検証を行った。

表1 ピアサポートプログラム (全5回、延べ15時間、79名参加)

	タイトル	内容 (参加人数)
第1回	ピアサポートとは	ピアサポートを感じるのとはどんな時か話し合い、グループ内の役割について学ぶ (17名)
第2回	きくスキル	メンバーの話に耳を傾ける、共感するスキルについて学び、練習をする (13名)
第3回	語るスキル	グループ内で自らの経験を語ることにについて学び、自己開示について扱う (14名)
第4回	自助グループ疑似体験①	「言いつばなし、聞きつばなし」「問題解決技法」などの実際の技法を体験 (19名)
第5回	自助グループ疑似体験②	ファシリテーター体験、板書体験、タイムキーパー体験、参加者体験。グループの振り返り、まとめ (16名)

D. 考察

神経研究所で行った全5回のピアサポートプログラムには延べ79名が参加した。

昭和大学と神経研究所にて合わせてプログラムには31名参加し、コントロール群には22名参加した。質問紙を用いた調査ではプログラム参加群において、プログラム後に、QOLが有意に向上 ($t=2.5$, $p=0.026$)、CSQ (コミュニケーション技能アンケート) で向上する傾向 ($t=2.1$, $p=0.054$) が認め

られた。参加群とコントロール群とのプログラム前後での比較では、QOL ($F=4.3$, $p=0.048$) と CSQ ($F=4.5$, $p=0.043$) において有意な交互作用が示された。また、CSQ-8 (サービス満足度) の得点平均は25.4点であり、先行研究 (立森ら) の平均22.3点を上回った。転帰として、神経研究所でのプログラム修了者のうち、14名が月に1度のペースで院内での半自助的なピアサポートグループに継続して参加している。

今後は継続したプログラムを通して個人個人のスキル向上を目指しながらも、グループ運営の“方法を学び、経験を増やす”ことが求められるだろう。そうすることによって、当事者自身が運営への具体的なイメージを構築し、新たな課題を能動的に発見・対処検討する力を身につけていく支援を行うことで、グループ運営のモチベーションを高めるものと期待する。

E. 結論

探索的ヒアリンググループおよびアンケート調査の結果からは、ASDにおけるピアサポートの重要性が示され、乗り越えるべき課題についても浮かび上がってきた。ASDでは障害特性から対人コミュニケーションが不得手であることから、自助的な活動の際には、一定のサポート、訓練、グループの構造化などの工夫が求められる。調査結果を更に解析、検討し、令和3年度はピアサポートプログラムの作成・実施を行った。神経研究所では、元々発達障害専門プログラム修了後にフォローアップとして続いているマスターコースにて、このピアサポートプログラムを実施した。プログラム前後での主観的評価 (自己効力感、自尊心、共感性、精神的健康度、QOL等) を用いて変化を検証する。マスターコースの特徴として、病院のグループを居場所としている方が多く、自助グループ運営に積極的ではないメンバーも含まれていた。

現在は、全5回のピアサポートグループを経て、参加した14名が半自助的なピアサポートグループに参加をしている (グループ参加脱落したものは1名のみであった)。プログラム終了後は、スタッフではなく参加メンバーがファシリテーター、板書、タイムキーパーを担いグループ運営を続けている。(2022年3月までで全4回、参加人数延べ58名)

このことから、先の見通しや、臨機応変な対応などに困難を生じやすいASD患者においては、自助グループを運営することも多い。実際にプログラム開始時には「専門家がいないと安心できない」「自分たちでできるとは思えない」という否定的な意見がグループ内でも聞かれた。しかし、医療機関にて安全な場で自助グループを運営する方法について学んでい

くことで、徐々に「自らで運営していくことへの自信やその意義」を見出すものが多く、自分たちで企画・運営することについての活発な意見交換が続けられている。企画・運営をすることで、メンバー同士の課題を“自分達のもの”として意識し、それを解消・解決するために自発的に関わろうとするような深いコミュニケーションが生まれ、グループへのやりがいを感じるものは多く、効果検証においても同様の結果が表れたのだと推察する。そのため、成人のASD患者のQOLを高めるためにもピアサポートプログラムを実施することは有効であるだろう。

また、生じてきた課題に応じて、当事者団体へのヒアリングを行い、そこで得た知見も含めて、当事者が自助会に参加・運営するために必要な条件の検討・整備を行った。熊本県にて長く発達障害の自助グループを運営しているLittle bit(リルビット)に見学に行き、自助グループ運営における枠組みや困難などを検討する時間を持った。メンバーの居心地の良さや安心・安全を担保するために必要なルール・目標の重要性について学び、2022年度からのピアサポートグループでは、メンバーの中でグループに必要なルールを挙げてもらい、必要なイベントややりたいことなどを提案していくという、より自助的な取り組みも含めて進めていく予定である。

2021年11月に開かれた成人発達障害支援学会においては、ピアサポートグループの取り組みについてシンポジウムを実施し、他の機関でのピアサポートグループ実施に向け情報提供を行った。

我々が実践してきたASDショート・ケアプログラムは有効性が示され、これまでに多くの当事者を社会参加に繋げてきた。しかしながら、各地域における支援機関や当事者の状況は様々であり、多様な現状に対応するために発達障害専門プログラムに対する付加的なプログラムの提供が求められている。ピアサポートプログラムは、これまでのASDショート・ケアプログラムやOB会の実践のなかで、利用者の認知および行動を変化させる中核的な要因としてのピアサポートに着目してプログラムを構成する。発達障害は基本的には生涯にわたり特性が持続するものであり、支援の継続性を担保することは重要である。コミュニケーションスキルなどの技術的側面よりも心理的側面へのアプローチを重視し、利用者の自律的な活動の助けを得て、支援の継続性や居場所としての機能も強化できることが期待される。更には乱立する発達障害の当事者会に対し、支援機関内におけるモデルとして情報を提供することで、当事者会の質の向上につながることも期待される。

東京都の発達障害診療地域中核拠点(2020年度～)である神経研究所では、訪問診療も含めた発達障害の生活支援、ひきこもり支援を進めている。神経研究所が提示する東京都における発達障害支援を一つのモデルとし、昭和大学発達障害医療研究所が全国ネットワークの中核として、発達障害診療専門拠点機関の全国化への道筋をつけていく。

また、本調査は2機関に対するものにすぎないため、東京都自閉症協会を通してつながった当事者会(熊本のリルビットなど)に対しても継続的に調査を行っていく必要もあると考える。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Fujino J, Tei S, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Kubota M, Hashimoto R, Takahashi H, Kato N, Nakamura M. Role of the right temporoparietal junction in intergroup bias in trust decisions. *Human Brain Mapping*, 41(6):1677-1688, 2020.
- 2) Itahashi T, Fujino J, Hashimoto RI, Tachibana Y, Sato T, Ohta H, Nakamura M, Kato N, Eickhoff SB, Cortese S, Aoki YY. Transdiagnostic subtyping of males with developmental disorders using cortical characteristics. *Neuroimage Clinical*, 27:102288, 2020.
- 3) Ohta H, Aoki YY, Itahashi T, Kanai C, Fujino J, Nakamura M, Kato N, Hashimoto RI. White matter alterations in autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in relation to sensory profile. *Molecular Autism*, 11(1):77, 2020.
- 4) Yoshihara Y, Lisi G, Yahata N, Fujino J, Matsumoto Y, Miyata J, Sugihara G, Urayama S, Kubota M, Yamashita M, Hashimoto R, Ichikawa N, Cahn W, van Haren NE, Mori S, Okamoto Y, Kasai K, Kato N, Imamizu H, Kahn RS, Sawa A, Kawato M, Murai T, Morimoto J, Takahashi H. Overlapping but asymmetrical relationships between schizophrenia and autism revealed by brain connectivity. *Schizophrenia Bulletin*, 46(5):1210-1218, 2020.
- 5) Kubota M, Fujino J, Tei S, Takahata K, Matsuoka K, Tagai K, Sano Y, Yamamoto Y, Shimada H, Takado Y, Seki C, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Hashimoto RI, Zhang MR, Suhara T, Nakamura M, Takahashi H, Kato N, Higuchi M. Binding of dopamine D1 receptor and noradrenaline transporter in individuals with autism spectrum disorder: A PET Study. *Cerebral Cortex*, 30(12):6458-6468, 2020.
- 6) Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunitatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Imamizu H. Generalizable brain network markers of major depressive disorder across multiple imaging sites. *PLoS Biology*, 18(12):e300096, 2020.
- 7) Itahashi T, Fujino J, Sato T, Ohta H, Nakamura M, Kato N, Hashimoto R, Di Martino A, Aoki YY. Neural correlates of shared sensory symptoms in autism and attention-deficit/hyperactivity disorder. *Brain Communications*, 2(2):fcaa186, 2020.
- 8) Shirama A, Takeda T, Ohta H, Iwanami A, Toda S, Kato N. Atypical alert state control in adult patients with ADHD: A pupillometry study. *PLoS One*, 15(12):e0244662, 2020.
- 9) Lin IF, Itahashi T, Kashino M, Kato N, Hashimoto R. Brain activations while

- processing degraded speech in adults with autism spectrum disorder. *Neuropsychologia*, 152:107750, 2021.
- 10) Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Pupillometric complexity and symmetry follow inverted-U curves against baseline diameter due to crossed locus coeruleus projections to the edinger-westphal nucleus. *Frontiers in Physiology*, 12:614479, 2021.
 - 11) Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Identification of attention-deficit hyperactivity disorder based on the complexity and symmetry of pupil diameter. *Scientific Reports*, 11(1):8439, 2021.
 - 12) Tanaka SC, Yamashita A, Yahata N, Itahashi T, Lisi G, Yamada T, Ichikawa N, Takamura M, Yoshihara Y, Kunimatsu A, Okada N, Hashimoto R, Okada G, Sakai Y, Morimoto J, Narumoto J, Shimada Y, Mano H, Yoshida W, Seymour B, Shimizu T, Hosomi K, Saitoh Y, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Kawato M, Imamizu H. A multi-site, multi-disorder resting-state magnetic resonance image database. *Scientific Data*, 8(1):227, 2021.
 - 13) Fujino J, Tei S, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Izuno T, Nakamura H, Shimizu M, Hashimoto RI, Takahashi H, Kato N, Nakamura M. A single session of navigation-guided repetitive transcranial magnetic stimulation over the right anterior temporoparietal junction in autism spectrum disorder. *Brain Stimulation*, 14(3):682-684, 2021.
 - 14) Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunimatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Imamizu H. Common brain networks between major depressive-disorder diagnosis and symptoms of depression that are validated for independent cohorts. *Frontiers in Psychiatry*, 10:12, 2021.
 - 15) Tei S, Fujino J, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Kubota M, Sawajiri S, Hashimoto RI, Takahashi H, Kato N, Nakamura M. The right temporoparietal junction during a cooperation dilemma: An rTMS study. *Neuroimage: Reports*, 1(3): 100033, 2021.
 - 16) Tei S, Tanicha M, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Qian C, Hashimoto RI, Nakamura M, Takahashi H, Kato N, Fujino J. Decision flexibilities in autism spectrum disorder: An fMRI study of moral dilemmas. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, Online ahead of print, 2022.
 - 17) 加藤進昌. 発達障害支援の現状とこれから. *心と社会*, 51(1) (179): 4-5, 2020.
 - 18) 村上あゆみ、牧山優. デイケアでの就労支援プログラムについて. *心と社会*, 51(1) (179): 44-50, 2020.
 - 19) 満山かおる、川嶋真紀子. 心理カウンセリングの可能性. *心と社会*, 51(1) (179): 51-56, 2020.
 - 20) 加藤進昌. 発達障害支援のこれからを考える. *そだちの科学*, 34:32-37, 2020.
 - 21) 加藤進昌. 発達障害概念の誕生～歴史と国際分類の変遷～. *Biophilia*, 9(2):1-4, 2020.
 - 22) 加藤進昌. 自閉スペクトラム症とは何か～自閉症とアスペルガー症候群. *Biophilia*, 9(2):6-10, 2020.
 - 23) 加藤進昌. その行動も？身近な発達障害 大人は生活の工夫で改善. *NHKきょうの健康*, 6月号, 46-49, 2021.
 - 24) 加藤進昌. その行動も？身近な発達障害 女性・高齢者は見落とされやすい？ *NHKきょうの健康*, 6月号, 50-53, 2021.
 - 25) 加藤進昌、太田晴久 (編集). 発達障害の患者学 治す医療から治し支える医療へ. *アドスリー*, 2021.
 - 26) 水野健、五十嵐美紀、横井英樹. 成人期 ADHD を対象とした心理社会的プログラム. *臨床精神医学*, 50(5):447-453, 2021.
 - 27) 中村善文、太田晴久、西尾崇志、土岐幸生、石部穰、林若穂、傅佳慧、加藤進昌、岩波明. 成人発達障害専門外来における診断名および自己記入式評価尺度の検討. *精神医学*, 63(10):1555-1567, 2021.
 - 28) 加藤進昌. 第9回 脳研究の第一人者・加藤進昌 東京大学名誉教授に聞く (1). *日経グッディ* 12. 23. 2021.
 - 29) 加藤進昌. 第10回 脳研究の第一人者・加藤進昌 東京大学名誉教授に聞く (2). *日経グッディ* 12. 26. 2021.
 - 30) 加藤進昌. ADHD の治療薬について教えてください. *NHKきょうの健康*, 1月号, 99, 2022.
 - 31) 加藤進昌. その行動も？身近な発達障害 大人は生活の工夫で改善. *NHKきょうの健康*, 2月号, 76-77, 2022.
 - 32) 加藤進昌. その行動も？身近な発達障害 女性・高齢者は見落とされやすい？ *NHKきょうの健康*, 2月号, 78-79, 2022.
 - 33) 五十嵐美紀、横井英樹、加藤進昌. 【発達障がい—神経基盤から支援・治療まで】成人期発達障害に対するデイケア・就労支援. *Clinical Neuroscience*, 40(3):366-370, 2022.
2. 学会発表
 - 1) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2020/6/19
 - 2) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2020/8/21
 - 3) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2020/10/12
 - 4) 加藤進昌. 職場の発達障害～その理解と対応～. 日本うつ病センター東京都地域特性重点特化事業「職場のメンタルヘルス」シンポジウム、ウ

- エブセミナー、2020/11/21
- 5) 加藤進昌. 大人の発達障害とは何か～いきづらさの正体～. 所沢市健康推進部保健センター健康管理課こころの健康支援室、令和2年度第2回こころの健康講座、埼玉・所沢市保健センター、2020/12/18
 - 6) 加藤進昌. 発達障害と生物学的背景. 令和2年度東京都発達障害者支援体制整備推進事業 医療従事者向け講習会、東京・飯田橋レインボービル、2020/12/20
 - 7) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2021/1/18
 - 8) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～病院経営とデイケア運営へのインパクト～. 陽和病院講義、東京・陽和病院、2021/1/25
 - 9) 加藤進昌. 成人の発達障害と障害者歯科. 東京都立心身障害者口腔保健センター主催障害者歯科認定医・認定歯科衛生士研修会、東京・東京都立心身障害者口腔保健センター、2021/2/7
 - 10) 加藤進昌. 成人期の発達障害の臨床～心理の本質の理解から社会的自立への支援まで～. 一般社団法人日本臨床心理士会 第14回障害の理解と支援に関する総合研修会(4)、オンライン、2021/2/21
 - 11) 加藤進昌. 精神科診療所における発達障害支援～グループワーク事始め. 令和2年度日精診・医療計画等検討プロジェクトチーム研修会、オンライン、2021/3/7
 - 12) 加藤進昌、五十嵐美紀. 大人の発達障害の理解と支援 令和2年度障害福祉の理解研修「大人の発達障害の理解と支援」、オンライン、2021/3/22
 - 13) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンライン、2021/6/10
 - 14) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンライン、2021/8/20
 - 15) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンライン、2021/10/15
 - 16) 加藤進昌. 発達障害とは何か、共に暮らすために～発達障害と精神障害～. 2021年度大家連精神保健福祉講座、オンライン、2021/10/23
 - 17) 加藤進昌. 大人の発達障害の医療と支援の今後. 板橋区発達障がい者支援センターあいポート講座、動画配信、2021/11/20～2022/3/31
 - 18) 加藤進昌. 大人の発達障害とは～心理劇によるアプローチを考える～. 第27回日本心理劇学会福岡大会、福岡、2021/12/4
 - 19) 加藤進昌. 発達障害の行動変容に心理劇は貢献できるか. 第27回日本心理劇学会福岡大会、福岡、2021/12/4
 - 20) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、総務省消防庁消防大学校、オンライン、2022/1/7
 - 21) 加藤進昌. 発達障害研究から脳の多様性～Neurodiversityに迫る～. 玉川大学脳科学研究所竣工記念講演会、東京、2022/1/20
 - 22) 加藤進昌. 発達障害に関するスキルアップ講座「U-SQUARE」. 世田谷区発達障害相談・療育センター講演、東京、2022/2/5
 - 23) 加藤進昌. 成人期の発達障害者に対する医療機関の取組について. 令和3年度東京都発達障害者支援体制整備推進事業シンポジウム、オンライン、2022/2/14
 - 24) 加藤進昌. 大人の発達障害の理解と支援. 障害福祉の理解研修、世田谷区福祉人材育成・研修センター、オンライン、2022/3/28
 - 25) 水野健. 大人の発達障害の理解と支援. 障害福祉の理解研修、世田谷区福祉人材育成・研修センター、オンライン、2022/3/28
- H. 知的財産権の出願・登録状況
1. 特許取得
該当なし
 2. 実用新案登録
該当なし
 3. その他
該当なし

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
岩波明(監修)、横井英樹	第6章 成人期発達障害の心理社会的治療	同左 他	おとなの発達障害 診断・治療・支援の最前線	光文社新書	東京	2020	181-205
岩波明、五十嵐美紀、水野健	第1章障害概念 IV. 大人の発達障害	日本発達障害連盟	発達障害白書 2021年版	明石書店	東京	2020	40-41
太田晴久(監修)、横井英樹、五十嵐美紀(監修協力)	大人の発達障害 仕事・生活の困ったによりそう本	太田晴久(監修)	大人の発達障害 仕事・生活の困ったによりそう本	西東社	東京	2021	
太田晴久	コラム6 成人期発達診療の現状と課題	土居裕和(編著)、金井智恵子(編著)	多職種連携を支える「発達障害」理解:ASD・ADHDの今を知る旅	北大路書房	京都	2021	137
加藤進昌、太田晴久(編集)	発達障害の患者学 治す医療から治し支える医療へ	同左	発達障害の患者学 治す医療から治し支える医療へ	アドスリー	東京	2021	
岩波明	発達障害はなぜ誤診されるのか	同左	発達障害はなぜ誤診されるのか	新潮選書		2021	

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Fujino J, Tei S, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Kubota M, Hashimoto R, Takashi H, Kato N, Nakamura M.	Role of the right temporoparietal junction in intergroup bias in trust decision tasks.	Human Brain Mapping	41(6)	1677-1688	2020

Itahashi T, Fujino J, Hashimoto RI, Tachibana Y, Sato T, Ohta A H, Nakamura M, Kato N, Eickhoff SB, Cortese S, Aoki YY.	Transdiagnostic subtyping of males with developmental disorders using cortical characteristics.	Neuroimage Clinical	27	102288	2020
Ohta H, Aoki YY, Itahashi T, Kanai C, Fujino J, Nakamura M, Kato N, Hashimoto RI	White matter alterations in autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in relation to sensory profile.	Molecular Autism	11(1)	77	2020
Yoshihara Y, Lisi G, Yahata N, Fujino J, Matsumoto Y, Miyata J, Sugihara G, Urayama S, Kubota M, Yamashita M, Hashimoto R, Ichikawa N, Cahn W, van Haren NE, Mori S, Okamoto Y, Kasai K, Kato N, Imamizu H, Kahn RS, Sawa A, Kawato M, Murai T, Morimoto J, Takahashi H.	Overlapping but asymmetrical relationships between schizophrenia and autism revealed by brain connectivity.	Schizophrenia Bulletin	46(5)	1210-1218	2020
Kubota M, Fujino J, Tei S, Takahata K, Matsuoka K, Tagai K, Sano Y, Yamamoto Y, Shimada H, Takado Y, Seki C, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Hashimoto RI, Zhang MR, Suhara T, Nakamura M, Takahashi H, Kato N, Higuchi M.	Binding of dopamine D1 receptor and noradrenaline transporter in individuals with autism spectrum disorder: A PET Study.	Cerebral Cortex	30(12)	6458-6468	2020

Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunimatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Imamizu H.	Generalizable brain network markers of major depressive disorder across multiple imaging sites.	PLoS Biology	18(12)	e300096	2020
Itahashi T, Fujino J, Sato T, Ohta H, Nakamura M, Kato N, Hashimoto R, DiMartino A, Aoki YY.	Neural correlates of shared sensory symptoms in autism and attention-deficit/hyperactivity disorder.	Brain Commun	2(2)	fcaa186	2020
Shirama A, Takeda T, Ohta H, Iwanami A, Toda S, Kato N.	Atypical alert state control in adult patients with ADHD: A pupillometry study.	PLoS One	15(12)	e0244662	2020
Lin IF, Itahashi T, Kashino M, Kato N, Hashimoto R.	Brain activations while processing degraded speech in adults with autism spectrum disorder.	Neuropsychologia	152	107750	2021
Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S.	Pupillometric complexity and symmetry follow inverted-U curves against baseline diameter due to crossed locus coeruleus projections to the edinger-westphal nucleus.	Frontiers in Physiology	12	614479	2021
Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S.	Identification of attention-deficit hyperactivity disorder based on the complexity and symmetry of pupil diameter.	Scientific Reports	11(1)	8439	2021

Tanaka SC, Yamashita A, Yahata N, Itahashi T, Lisi G, Yamada T, Ichikawa N, Takamura M, Yoshihara Y, Kunimatsu A, Okada N, Hashimoto R, Okada G, Sakai Y, Morimoto J, Narumoto J, Shimada Y, Manoh H, Yoshida W, Seymour B, Shimizu T, Hosomi K, Saitoh Y, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Kawato M, Imamizu H.	A multi-site, multi-disorder resting-state magnetic resonance image database.	Scientific Data	8(1)	227	2021
Fujino J, Tei S, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Izuno T, Nakamura H, Shimizu M, Hashimoto RI, Takahashi H, Kato N, Nakamura M.	A single session of navigation-guided repetitive transcranial magnetic stimulation over the right anterior temporoparietal junction in autism spectrum disorder.	Brain Stimulation	14(3)	682-684	2021
Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunimatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Imamizu H.	Common brain networks between major depressive-disorder diagnosis and symptoms of depression that are validated for independent cohorts.	Frontiers in Psychiatry	10	12	2021
Tei S, Fujino J, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Kubota M, Samajiri S, Hashimoto RI, Takahashi H, Kato N, Nakamura M.	The right temporoparietal junction during a cooperation dilemma: An rTMS study.	Neuroimage: Reports	1(3)	100033	2021

Naya N, Sakai C, Okutsu D, Kiguchi R, Fujiwara M, Tsuji T, Iwanami A.	Efficacy and safety of guanfacine extended-release in Japanese adults with attention-deficit/hyperactivity disorder: Exploratory post hoc subgroup analyses of a randomized, double-blind, placebo-controlled study.	Neuropsychopharmacology Reports	41(1)	26-39	2021
Nakagawa A, Hayashi W, Nishio T, Hanawa Y, Aoyagi K, Okajima Y, Iwanami A.	Similarity of subjective symptoms between autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in adults: Preliminary findings.	Neuropsychopharmacology Reports	41(2)	237-241	2021
Takamuku S, Ohta H, Kanai C, de C Hamilton A F, Gomi H.	Seeing motion of controlled object improves grip timing in adults with autism spectrum condition: evidence for use of inverse dynamics in motor control.	Experimental Brain Research	239(4)	1047-1059	2021
Hayashi W, Hanawa Y, Iwami Y, Aoyagi K, Saga N, Nakamura D, Iwanami A.	Correction to ASD symptoms in adults with ADHD: a preliminary study using the ADOS-2.	European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience	272(2)	233	2022
Tei S, Tanichida M, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Qian C, Hashimoto RI, Nakamura M, Takahashi H, Kato N, Fujino J.	Decision flexibility in autism spectrum disorder: An fMRI study of moral dilemmas.	Social Cognitive and Affective Neuroscience	Online ahead of print		2022
加藤進昌	発達障害支援の現状とこれから。	心と社会	51(1)(179)	4-5	2020
五十嵐美紀、水野健	発達障害診療専門拠点機関の全国的な整備に向けてのガイドライン—成人発達障害者について—。	心と社会	51(1)(179)	13-18	2020
太田晴久	ひきこもりと発達障害。	心と社会	51(1)(179)	38-43	2020
村上あゆみ、牧山優	デイケアでの就労支援プログラムについて。	心と社会	51(1)(179)	44-50	2020

満山かおる、川嶋真紀子	心理カウンセリングの可能性.	心と社会	51(1)(179)	51-56	2020
横井英樹	地域での発達障害支援の取り組みー全国状況.	心と社会	51(1)(179)	98-103	2020
太田晴久	【精神科臨床評価マニュアル(改訂版)】(第3章)精神科臨床評価特定の精神障害に関連したもの 神経発達症群/神経発達障害群 広汎性発達障害.	臨床精神医学	49(8)	1466-1472	2020
太田晴久	精神科併存症を考慮した発達障害の診断と薬物療法.	臨床精神薬理	23(9)	925-932	2020
加藤進昌	発達障害支援のこれからを考える.	そだちの科学	34	32-37	2020
加藤進昌	発達障害概念の誕生～歴史と国際分類の変遷～.	Biophilia	9(2)	1-4	2020
加藤進昌	自閉スペクトラム症とは何か～自閉症とアスペルガー症候群.	Biophilia	9(2)	6-10	2020
太田晴久	発達障害に対して医療ができること～診断から治療へ～.	Biophilia	9(3)	1-4	2021
横井英樹、水野健	ダイケアプログラムー仲間と共に学び成長する場ー.	Biophilia	9(3)	6-12	2021
五十嵐美紀	成人期発達障害の家族支援.	Biophilia	9(3)	26-32	2021
太田晴久	これからの支援は.	Biophilia	9(3)	40-44	2021
太田晴久	成人期の発達障害.	東京の精神保健福祉	40(2)	1-3	2021
加藤進昌	その行動も？身近な発達障害 大人は生活の工夫で改善.	NHKきょうの健康	6月号	46-49	2021
加藤進昌	その行動も？身近な発達障害 女性・高齢者は見落とされやすい？	NHKきょうの健康	6月号	50-53	2021
水野健、五十嵐美紀、横井英樹	成人期ADHDを対象とした心理社会的プログラム.	臨床精神医学	50(5)	447-453	2021

岩波明、林若穂	発達障害の概念を理解するための仮説 ADHDの病態は明らかとなったか 仮説というファントム.	精神医学の基礎	1	184-195	2021
岩波明、林若穂、宮保嘉津真	成人期ADHDの症状評価スケール.	精神科	38(3)	324-331	2021
小島睦、中村暖、林若穂、宇野宏光、花輪洋一、笹森大貴、太田晴久、岩波明	気分障害患者における自閉症スペクトラム指数(AQ)、コナーズ成人ADHD評価スケール(CAARS)の得点傾向と解釈.	昭和学会雑誌	81(3)	259-265	2021
澤登洋輔、高塩理、橋本龍一郎、林若穂、小島睦、小野英里子、西尾崇志、青柳啓介、太田晴久、板橋貴史、岩波明	自閉症スペクトラム障害における社交不安の神経解剖学的相関:Voxel-Based Morphometryを用いた予備的研究.	昭和学会雑誌	81(3)	229-241	2021
中村善文、太田晴久、西尾崇志、土岐幸生、石部穰、林若穂、傅佳慧、加藤進昌、岩波明	成人発達障害専門外来における診断名および自己記入式評価尺度の検討.	精神医学	63(10)	1555-1567	2021
加藤進昌	第9回 脳研究の第一人者・加藤進昌 東京大学名誉教授に聞く(1)	日経グッディ	12.23		2021
加藤進昌	第10回 脳研究の第一人者・加藤進昌 東京大学名誉教授に聞く(2)	日経グッディ	12.26		2021
加藤進昌	ADHDの治療薬について教えてください.	NHKきょうの健康	1月号	99	2022
加藤進昌	その行動も?身近な発達障害 大人は生活の工夫で改善.	NHKきょうの健康	2月号	76-77	2022
加藤進昌	その行動も?身近な発達障害 女性・高齢者は見落とされやすい?	NHKきょうの健康	2月号	78-79	2022
五十嵐美紀、横井英樹、加藤進昌	【発達障がい—神経基盤から支援・治療まで】成人期発達障害に対するダイケア・就労支援.	Clinical Neuroscience	40(3)	366-370	2022